

西 晋 の 鏡

近 藤 喬^{たか いち}

-
- | | |
|----------------------|------------------------------|
| 1. 問題点と検討方法 | 6. 福井泰遠寺山古墳と愛媛天山1号墳の青蓋鏡 |
| 2. 文献からみた呉と西晋の対立 | 7. 中国出土青蓋鏡の検討 |
| 3. 紀年墓からみた呉と西晋の勢力圏 | 8. 泰遠寺山古墳と天山1号墳出土青蓋鏡のもつ歴史的意味 |
| 4. 紀年鏡からみた呉・魏・西晋鏡の特色 | |
| 5. 呉と西晋の紀年墓と鏡 | |
-

論 文 要 旨

本論考では西晋時代の鏡について論じた。邪馬台国の女王卑弥呼の没後、宗女壹与が位をついで倭国の乱は治まり、壹与の使いは西晋の武帝即位の翌年、入朝している。倭が中国史書の上に登場するのはこの遣使を最後とし、五世紀代倭の五王の遣使まで無いといわれてきた。日本の考古学の時代区分の上では弥生時代の終りから古墳時代の初めにかけて、西晋265～316年という期間は、重要な時代の変換点を占めている。当時、倭人社会で王権のシンボルとしての位置を占めていた鏡がどのようなものであったか、中国の側からみた確実なデータに基づく論考はほとんど無い。

近年、中国社会科学院の王仲殊や徐萃芳氏らの論考によって、三国～六時代の鏡の動向がかなり知られるようになった。しかし彼等の論考は、基本的に鑄造業の劣悪な条件にあった華北と条件に恵まれていた江南という図式が先見的に存在し、必ずしも客観的なものとなっていないのではないかと私は思っている。

今回、呉と西晋の紀年墓の資料を選びだし、そこから出土している鏡がどのようなものを提示した。紀年鏡の流れにそれらを重ねあわせる時、呉と魏・西晋の鏡の異同は明確になると考える。また福井泰遠寺山古墳及び愛媛天山1号墳出土青蓋銘環状乳神獸鏡について検討を加えた。それらが西晋太康年間初鑄の可能性の高い鏡であり、前者は西晋の後者は東晋以降の南朝の皇帝から倭の首長及び軍郡の長に叙正された將軍號などとともに下賜された鏡である可能性の高いことを論じた。あるいは倭人社会へ中国皇帝からの叙正にもなってもたらされて以後、軍団の長から有力地方豪族の長への下賜品の可能性の高いことなど、西晋鏡の倭人社会への受容のされ方とその後の歴史的展開についても論じた。